地域安全特集：ASEAN 国防相会議に見る ASEAN と中国の関係

漢和防務評論 20160203（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

昨年 11 月マレーシアで行われた ASEAN 国防相拡大会議では、南シナ海問題で意見の一致が見られず共同宣言が見送られました。
背景にあるのは中国の ASEAN に対する経済的、軍事的圧力であり、中国の了解なしには何も決められない実態が明らかになりました。
ASEAN は、米中の対立に右往左往するばかり、インドネシアの新幹線が中国に持って行かれた理由が解りました。目的のためなら手段を選ばない中国に対して日米はどう対応するか。きれい事では済まされない現実が迫っています。

KDR クアラルンプール KHOO JIN KIAT 特電：
2015 年 11 月 3 日から 4 日にかけてクアラルンプールで第 3 回 ASEAN 国防相拡大会議（ADMM Plus）が開催された。各成員国は南シナ海問題で共通認識を得ることが出来ず、共同宣言はお流れになった。このことは、ASEAN 国防相会議にとって衝撃であっただけでなく、中馬関係（中国とマレーシア関係）に微妙な変化をもたらした。
中国は、南シナ海問題に関して、中馬関係が良好なモデルであると見ていた。2015 年 9 月に両国は、国交開始以来初めての共同演習を行った。2015 年に入り、中国は、大規模埋立を含め、南シナ海でそれほど大きな活動を行っていなかった。少なくとも 2015 年は中国海軍による曾母暗沙（ジェームス礁、中国が領有権を主張）に対する進出はなかった。
この共同演習は、両国の協力関係を深める上で一定の効果はあったが、長くは続かなかった。
第一：演習終了後まもなく、中国の駐マレーシア大使黄恵康（HUANG HUIKANG）がマレーシアの国内政治事件に干渉する言論を発表した疑いが発生、マレーシア政府の不快感を示した。この事件によってマレーシア外交部は黄大使を呼びだし、説明を求める事態となった。
マレーシア国内では、次々に政治的なトラブルが発生しており、そのたびに種族間の緊張が高まっている。一方黄恵康は華人地区を巡視した際、中国は特定の種族に対する如何なる差別にも反対する、と発表した。黄恵康が発表した言論は、マレーシア国内の種族問題への干渉と受け取られた。更に黄大使の言論は、マレーシア華人社会を不都合な情況に陥らせた。なぜなら、マレー人社会は、マレーシア華人が中国による政治干渉を求めていると認識したからである。
黄恵康の言論は、個人的言論か、或いは中国政府の意向を受けたものであるかは分からない。この事件は、最終的に終息するにしても、実際上は両国関係に大きな負

の効果をもたらした。
さらに、中馬両国間で、再び南康暗沙（中国が領有権を主張、マレーシアが実効支配）問題が発生した。2015 年の後半から、南康暗沙に関する争いが浮上した。マレーシア官方は、南康暗沙を BETING PATINGGI ALI と称している。2015 年 8 月、マレーシアの考古学研究グループが BETING PATINGGI ALI に上陸し百年前に沈没した沈船を調査した際、同沈船にマレーシア国旗を立てた。このことに中国は不満を呈した。これだけでなく、中国の海警船は南康暗沙に次々に出現した。2015 年 11 月、メディアは、中国海警船が当地で漁業中のマレーシア漁民を駆逐したと報じた。
ASEAN 国防相拡大会議では、マレーシア外交相 ANIFAH AMAN が稀に見る強硬な口調で、BETING PATINGGI ALI はマレーシアに属すること、如何なる国家も”重複訴訟”することはできない、と主張した。この談話は明らかに中国に対するものであった。2015 年 10 月 27 日、米国海軍は、南シナ海での航行の自由作戦において、米海軍駆逐艦”ラッセン”号を東マレーシアの沙巴から出港させ、中国が支配する南シナ海の島礁に進入させた。その前”ラッセン”は、10 月 19 日に東マレーシアの沙巴海軍基地に到着し停泊していた。
”ラッセン”号が中国の島礁に向けて航行するのをマレーシアが知っていたかどうかは明確でないが、マレーシアの海軍基地から出発したことは事実である。このことは、中国のマレーシアに対する感情を悪化させた。その後の ASEAN 国防相拡大会議では、中国は共同宣言の発表に対して強硬に反対した。明らかに中国は、”良好で模範的な中馬関係”に思いを致す余裕はなかったのであろう。
このことは、ASEAN 国防相拡大会議に傷害を与えただけでなく、実際は中馬関係にも傷害を与えた。なぜなら共同宣言が発表出来なかったからである。打撃を受けたのは主催国のマレーシアである。拡大会議終了後、11 月 5 日、マレーシア国防相 HISHAMUDDIN HUSSEIN は、中国国防部長常萬全及び米国国防長官カーターと個別に会談した。前者との会談はクアラルンプールの国防部で行われた。しかし後者との会談は南シナ海を航行中の強襲揚陸艦”ワスプ”号上で行われた。”ラッセン”号も同時に航行していた。
米国とマレーシアの国防相が共同で米国艦艇を訪問することは、前代未聞であり、マレーシアにとっては、近代になって初めての出来事である。当時”ワスプ”号は確実に南シナ海にあったが、敏感な水域内ではなかった。しかしそうであっても、今回の米艦への共同訪問の映像と情報は、中国に伝えられ、中国を震撼させるには十分な効果があった。
これは言わば”一帯一路”戦略と”アジア回帰”戦略の衝突であり、今回初めてマレーシアに於いて激烈に演じられたと言える。マレーシアは、中国と米国間の平衡点を探っている。しかも完全無欠な平衡点であり、マレーシアにとっては重い挑戦である。しかしマレーシアは南シナ海で中国の圧力に直面している。中国が中馬関係を”良好で他の模範”となるよう画策しようとも、一方で中国艦隊は係争中の曾母暗礁に出現している。また中国海警船は係争中の南康暗沙にも出現しマレーシア

に圧力をかけている。
結論は次の通り：一連の事件発生後、中馬関係は明らかに微妙に変化している。中馬関係は、中国にとって南シナ海問題解決の良好な模範となりうるのか？今のところ、何とも言えない。

わずか 3 日間で ASEAN は南シナ海問題により分裂状態になった。その結果共同宣言（KL DECLARATION）が発表出来なかった。
今回事件が発生したのは第 3 回 ASEAN 国防相拡大会議（ADMM Plus）の場であった。
同会議は、2015 年 11 月 3 日から 4 日にかけてクアラルンプールで行われた。会議は、南シナ海問題で成員国間に意見の相違があるため、最終的に共同宣言が発表出来なかった。この事件は、主催国マレーシアに衝撃を与えただけでなく、間接的に同拡大会議に対する信頼感を低下させ、同組織における今後の対話協力の効果に疑問符を付けた。
ASEAN が共同宣言を発表出来なかった最初の事例は 2012 年であった。当時、主催国はカンボジアで、ASEAN 外交相会議で、内部に激烈な意見の相違があり、共同宣言の発表が出来なかった。これは内部の意見対立による共同宣言発表見送りの最初の事例であった。3 年後にまた同じことが繰り返された。但し 2012 年と異なるところは、今回は ASEAN 国防相会議のメンバー内部の対立であって、ASEAN 自身の内部対立ではないことだ。
実際のところ、2015 年、中国は ASEAN と共同宣言問題でしばしば摩擦を発生させた。2015 年 4 月の ASEAN サミット以降、中国は ASEAN が発表する共同宣言を相当気にしていた。一方、マレーシアは、中国及び ASEAN 内部の中国の手先からの圧力をはね返し、共同宣言発表のための共通認識を得ようとしていた。
ASEAN 関係者は、KDR に対し次のように述べた。”ASEAN 国防相会議内部では、すでに共同宣言に南シナ海問題を取り上げるための共通認識を得ていた。しかし ASEAN のパートナー国家、特に 2 大強国の共通認識が得られなかった、と。”

KDR は次のように理解した：ASEAN 国防相拡大会議では南シナ海問題を提議することは無理である、と。2010 年の第一回、及び 2013 年の第二回 ASEAN 国防相拡大会議の共同宣言でも南シナ海問題は提起できなかった。
会議の消息筋は KDR に対し次のように述べた：米国は、共同宣言に南シナ海問題を提起することを希望しているが、中国は譲歩しようとしない。共同宣言に関する争論の後に、ASEAN は中国に譲歩の内容を示したようだったが、後に再び米国の不興を招いた。討論が続けられたが、今回の共同宣言は最終的に取り消された。中国は、南シナ海での行動規範を拒否しており、成員国は海上の安全協力を促進し、平和と安定を維持することに努力する、と書くだけで良いとしている。会議の消息筋は、遺憾に思いながら KDR に次のように述べた：南シナ海問題を共同宣言に入れなくとも、実際は関係ない。なぜなら、この問題は元々ASEAN 国防相会議では

処理できないからだ、と。

しかしこの消息筋は中国の強烈な圧力に対して疑問を感じていた。なぜなら、拘束力のある行動準則と航行の自由の保障は、一般的内容であって特定の国を対象としたものでなく、中国がこれほど強烈に反対する理由が見当たらなかったからである。”私は、中国がこれほど反対する理由が分からない。可能性があるのは、米国の南シナ海での挑発行為を恐れているからなのか。”消息筋は反復してこのように強調した。共同宣言の取り消しは、今後の ASEAN 国防相拡大会議の発展に良くない影響をもたらした。2010 年以来初めて、ASEAN 国防相拡大会議が共同宣言を発表できなかったからである。
ASEAN 国防相拡大会議とは、ASEAN 国防相会議（ADMM）を拡大した区域防衛協力のメカニズムである。しかし今回事件の衝撃は、将来の協力関係にとって悪影響をもたらす。今回の事件は、以下に述べる問題点を明らかにした：第 1、ASEAN は、米中間の対立をコントロールしたり、和らげたりすることは出来ないこと。第 2、米中間の対立は、ASEAN のメカニズムに対して直接衝撃を与え、信頼性を損なうこと。第 3、ASEAN 国防相拡大会議は、地域の防衛協力促進のために、引続き有効に役割を果たせるのか？対立を減らす効果はあるのか？最後に反省の念が湧きあがった。第 4、この事件の後で、ASEAN 軍事首長拡大会議メカニズム（ACDFM Plus）は実現の可能性はあるのか？

米国艦船が中国が支配する島礁に進入した問題に関して、ASEAN 内部でも密かな意見対立がある。一部の国家は、米国の行為は中国に対する挑戦であり、南シナ海埋め立て問題の解決にはつながらない。かえって情勢を悪化させるだけだ、と考えている。
しかし一部の国家は、これは、良い悪いの問題ではない。米国の行為は、国際法で許された航行の自由に基づく行為である、と。
これに対して、インドネシア国防相 RYAMIZARD RYACUDU は、会議の最終日に共同会見を行って次のように述べた：会議では航行の自由問題に関する話は無かった。中国は、海上或いは航空の自由は問題ない、とすでに明確に説明している。”インドネシアの立場は、南シナ海情勢の平和と緊張緩和を求めることである”と。彼は、”インドネシアは南シナ海の安定を共同して維持し、対立を縮小し、相互の共通認識を広めることを希望する”と述べた。KDR は、この共同会見において 2 つの問題を質問した。一つは、中国が 2016 年に希望している ASEAN 国家との南シナ海での「海上緊急遭遇規則」の共同訓練である。RYAMIZARD RYACUDU は、「海上緊急遭遇規則」は軍艦が遭遇した場合の緊張状況を減じることが出来る、と説明したが、賛否に関する返答は無かった。
KDR は再び質問した。”部長は、中国の香山論壇に出席した際、中国のテレビに、中国の南シナ海島礁での建設を尊重するとの談話を発表したが、事実か？”と。
部長は、そのような談話は発表していない、緊張した情勢を緩和する必要がある、

と述べただけである、と述べた。
”私は、その部分を提起したことはない。私が提起したのは緊張状態を緩和すべきであることだ。中国はすでに開放的態度を堅持している。我々は共同して緊張した情勢を緩和しなければならない。もし我々がこのように言えば、海上を埋め立てる国家が続々と出てくるであろう”と、述べた。
KDR が非公式にインドネシア代表団にこの件に就いて問い合わせた時、インドネシア官員は、”国防相は、中国の南シナ海島礁での建設を尊重するなどと発表するはずがない。なぜなら、このような談話はインドネシアの国家政策に反し、しかもASEAN の立場にも符合しないからだ”と述べた。

最後に、今回の国防相拡大会議は、全く成果が無かったわけではない。少なくとも、ASEAN 国防相は、直接連絡ネットワーク（DIRECT COMMUNICATION LINK）の設立に署名した。直接連絡ネットワークの設立によって、主として ASEAN 国防相が、必要時、簡易かつ迅速、安全な方法でパートナーと協力連携が出来る。各種突発事件、或いは国際紛糾事件に際して協議が可能になり、また有効かつ全面的な対応措置が採れ、衝突のエスカレートを防止し、コントロール不能な情況に陥るのを避けることが出来るようになる。

以上